

住宅時事往來

外国人の居住問題を考える NO.12 1999/ February

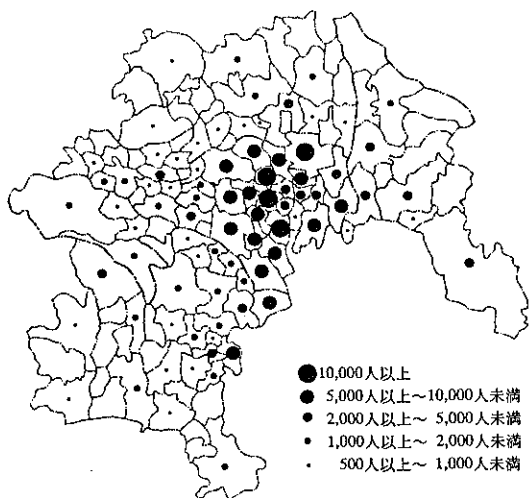
編集・発行：まち居住研究会（ジオ・プランニング内）
東京都千代田区富士見 2-2-12 ニュージャビル3F 〒102
tel. 03-3238-0574 fax. 03-3238-7878

editing&publication: The Community Living Research Group
c/o GEO Planning, Inc. :3F, 2-2-12 Fujimi
Chiyoda-ku, Tokyo 〒102

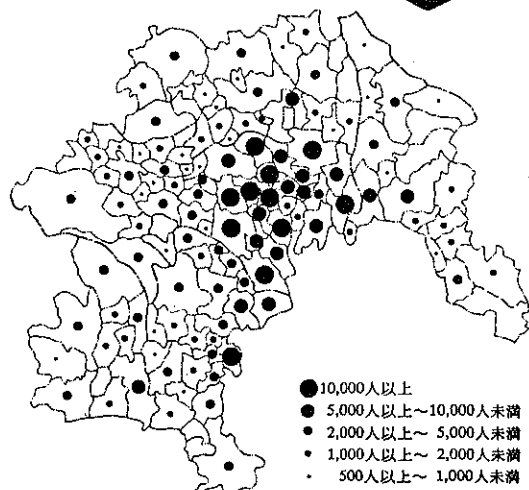
国際化する 街と人

来日する外国人が激増した1980年代後半から1990年代前半を経て、「ニューカマーズ」と呼ばれた外国人も、長い人で在日10年を経過しようとしている。その間、その時々々の経済状況や政治情勢を反映して入国する人々の国籍はめまぐるしく変わり、また、彼らを受け入れる日本社会もさまざまな試行錯誤を行ってきた。1987年に0.72%であった日本の総人口に占める外国人登録者の割合は、年々増加を続け、1992年に1%を超えた。その後、バブルが崩壊し、日本の景気が陰りを見せ始めてからも、外国人登録者数は増加の一途をたどり、1997年には全国で1,482,707人となり、人口比率は1.18%に達している。1都3県エリア（*1）の外国人登録者数を見ると、1997年には東京では256,465人、神奈川県では108,680人、埼玉県では67,037人、千葉県では61,027人が外国人登録をしており、1987年、1992年と比べ都心から離れた周辺にまで、広く外国人が居住地を拡大している様子が読みとれる。

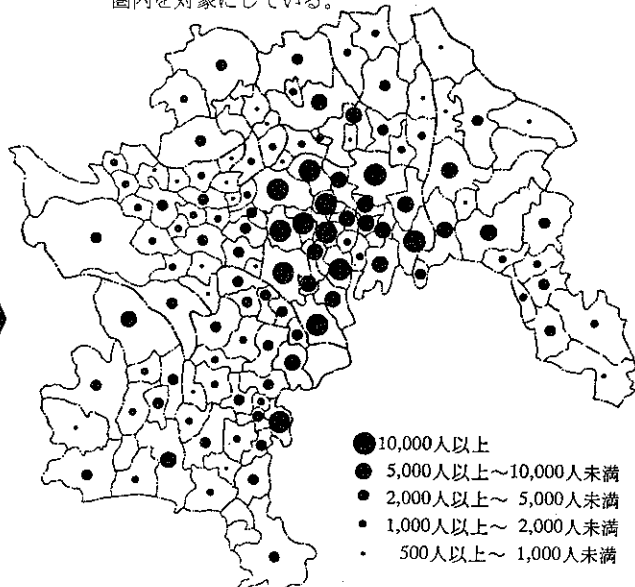
*1 東京都内、神奈川・埼玉・千葉県内のうち、日本人人口密度の高い地域として、東京30km圏内及び横浜20km圏内を対象としている。



外国人登録者総数（1987年12月末現在）



外国人登録者総数（1992年12月末現在）



外国人登録者総数（1997年12月末現在）

首都圏にみる外国人の居住動向

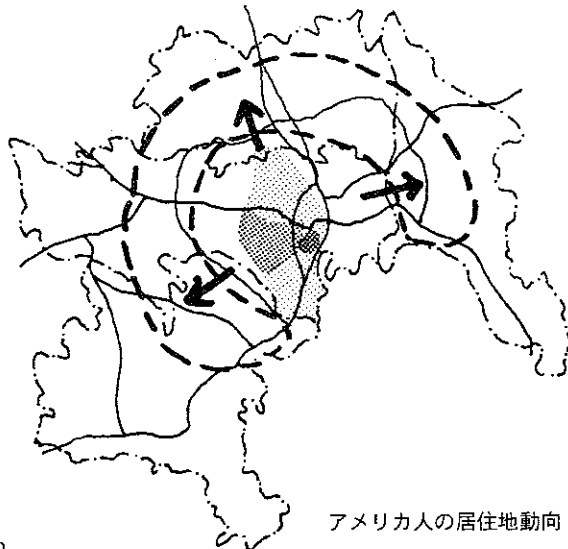
ここでは、1都3県エリアでの外国人の居住地動向をより詳細に知るために、①アメリカ、②韓国・朝鮮、③中国、④バングラデシュ・パキスタン・イランの4つのグループを取り上げ、1980年代～1990年の動向を過去の『住宅時事往来』から、また、その後の動向を1992年と1997年の外国人登録者数データから整理する。

◆都心回帰と分散が同時進行

.....アメリカ

1980年代後半から1990年にかけては、それまで港区、千代田区など都心に集中していた人口が、ゆるやかに増加しながら世田谷区、渋谷区、目黒区といった西側に伸びる現象がみられた(*2)。要因として、バブル景気による家賃の高騰が、外国人の居住地を外側へ押し出す現象を招いているという不動産関係者の話が聞かれた。また、アメリカ人をはじめとする欧米出身者には、外資系企業の駐在社員や国際業務に関わる専門職、教授・技術者、語学教師などの就労ビザで入国するホワイトカラーとその家族が占める割合が高く、居住環境、子どもの教育環境(母国語学校の立地)、交通アクセスなどを考慮して、山の手から西方面にかけての地域を選択しているからだと推察された。

その後の1992年と1997年を比較してみると、1都3県エリアでの登録者数は25,543人から25,434人と漸減している。内訳をみると、東京都はゆるやかに減少している一方で、周辺県は逆に増加傾向を示している。しかし、全体として減っている東京都の中で、中央と港の都心2区だけは、アメリカ人人口(実数)と全人口に占めるアメリカ人人口の割合(人口比率)がともに上昇している。特に港区では、人口比率は2.3%、都内アメリカ人の22%を超える3,700人が居住しており、周辺県へ人口が分散している一方で、都心回帰の現象も発生していることが分かる。



アメリカ人の居住地動向

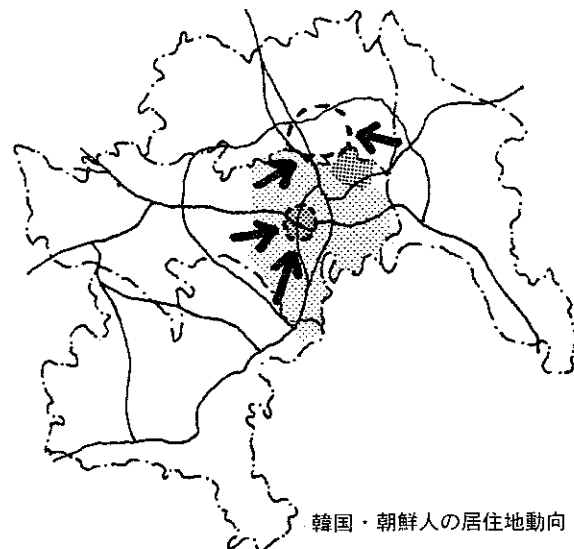
◆集中化で拠点形成

.....韓国・朝鮮

韓国・朝鮮の外国人登録者には、第二次大戦前後から日本に居住するいわゆる「在日韓国・朝鮮人」が含まれるため、全国的にも1都3県エリアでも国籍別人数では第1位であり、かつ居住地は他のグループに比べエリア全域に広がっている。登録者数でみると、23区内及び川崎市と横浜市にかけての地域に多く居住している。

1980年代後半からニューカマーズと呼ばれる新規入国者の「留学」や「就学」などの目的での入国が激増し、その結果、従来は足立区、荒川区に集中していた韓国・朝鮮人は、新宿区、豊島区、中野区及び東京の周辺部でも急増しドーナツ状の分布を示した(*2)。

1992年になってもエリア全体としての増加が続き、23区全体の人口比率は1%を超えた。新宿区での人口増加もさらに続いた。しかし、1都3県エリアでは登録者が163,955人となった1992年をピークに埼玉県を除いて減少に転じている。1997年には約5000人減の159,669人となっている。その中で、実数も増加し、人口比が92年と比較して0.1%以上の伸びをみせているのは、千代田区、中央区、新宿区、台東区と埼玉県川口市だけであり、特に新宿区の人口比率は2.89%にも達し、都内の韓国・朝鮮人の1割弱が集中している。韓国・朝鮮の場合は、人口の集中化が進み、拠点が形成されていく様子が読みとれる。



韓国・朝鮮人の居住地動向

◆集中から分散へ

.....中国

1980年代から1990年代に来日している中国出身者(台湾を含む)をみると、専門知識・技術や日本語の習得を目的とした「留学」「就学」と、中国残留孤児・婦人の帰国に伴って入国する人が全体の7割近くを占めているという点が特徴的である。特に留学生・就学生が激増した1980年代後半には、学校、アルバイト先と低廉な賃貸住宅が立地する豊島・新宿区に都内在留者の30%近くが集中し、この2区を取り囲むように居住地が形成されていた。その後、低廉な賃貸住宅の不足などの要因により、東京では隅田川以東の各区と千葉県の京葉線沿い、埼玉方面では埼京線・京浜東北線沿い、神奈川では東海道・東急東横線沿いに居住地が伸びていった(*2)。

1992年から97年の居住地動向をみると、全体としては依然漸増傾向にあるが、23区では減少し、周辺県で伸びをみせている。特に、東京都と周辺県の境界線上の鉄道沿線での人口比率の増加が著しい。人口比率が0.3%を超える地域は、北は埼玉県岩槻市、東は千葉市中央区、西は福生市、南は横浜市磯子区を結ぶ広範囲にまで伸びている。97年の在留資格別外国人登録者数をみると、従来の「留学」「就学」は減少し、「投資・経営」「人文知識・国際業務」「技術」など国内での就労を目的とした在留資格と「家族滞在」や「日本人の配偶者」といった資格で滞在・入国する中国人が増加しており、新宿・豊島など都心部の低廉な賃貸住宅にこだわる必要のない層が良い条件の住宅を求めて周辺に移動し、1都3県エリアに広がっている現状が読みとれる。

*これらの図は、1992年から1997年にかけての外国人の居住地動向を示す概念図である



中国人の居住地動向

●東京都から周辺県に移動

.....バングラデシュ・パキスタン・イラン

アジアからの男性労働者として入国者数の多いバングラデシュ、パキスタン、イランを取り上げる。

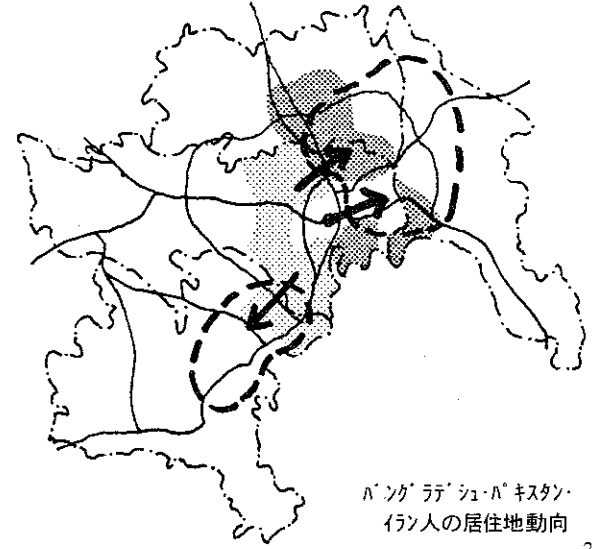
1987年では、1都3県エリアで3,757人あまりであった登録者は、1992年では7,576人、1997年では10,596人となっており、着実に増加している。

1987年時点では、豊島区から、北区、板橋区、足立区にかけての地域及び品川区と大田区にかけて登録者が多かった。1992年になると、板橋区から足立区にかけての1帯から埼玉、千葉方面にかけての地域に居住地が広がりをみせた。国籍別に詳細をみると、バングラデシュは北区、板橋区、豊島区に集中しており、パキスタンは、足立区、江戸川区、埼玉県川口市、千葉県市川市など、バングラデシュの外側を囲むように居住している。イランをみると、江戸川区、埼玉県川口市と越谷市とに集中している(*2)。

1997年のバングラデシュとパキスタンをみると、さらに居住地は外側に広がりをみせ、埼玉県では岩槻市、春日部市、三郷市などに、千葉県では市川市、松戸市、船橋市などに、東京では西方面の八王子市でそれぞれ増加が著しい。また、イランは、大田区から川崎市と横浜市方面に集中している。彼らの多くは、宗教上の戒律による生活の制限を受けるイスラム教徒であり、文化的国籍的な背景をもとに、ゆるやかな住み分けが行われている様子がうかがえる。

(文責：小菅寿美子)

*2 『住宅時事往来』NO.1～5、1992～1993年
外国人居住研究会『東京における外国人居住者の住まいと住環境に関する研究(その1)』住宅総合研究財団、1992年



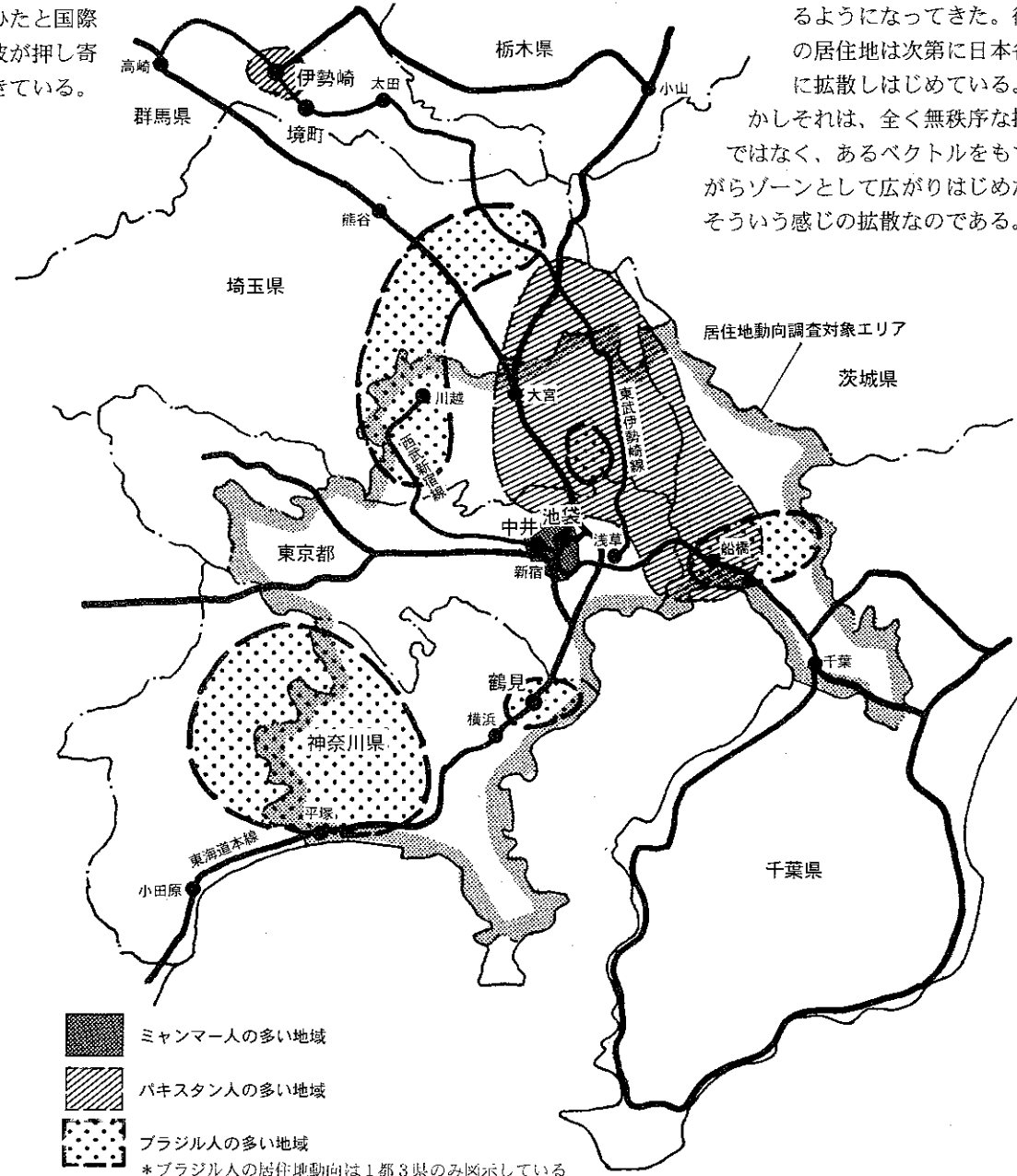
バングラデシュ・パキスタン・イラン人の居住地動向

全国津々浦々、国際化の時代がやってきた！

見慣れた商店街の中に、ふと気付くといつのまにやらアジア各国のカレー専門店が軒を並べていたり、久しぶりに帰郷したら、駅前に見慣れぬ南米レストランが出来ていた……、近頃そんな話をよく耳にする。

内なる国際化は、今や、大久保・池袋など盛り場や、外国人労働者問題で有名になった企業城下町や、東北地方の農村花嫁など、一部の地域のみに見られる特殊現象とは言えなくなってきた。ごくありふれた普通の街や、これといった特色もない地方都市にまで、ひたひたと国際化の波が押し寄せてきている。

1980年代後半から90年代初頭にかけて急増した在留外国人の数は、バブル経済崩壊以降、数値的には漸増傾向に落ち着いている。しかし、彼らは着実に日本という異国に根をおろし、徐々にネットワークを形成しはじめているようだ。現在の彼らは、10年前に母国からいきなり東京という見知らぬ大都会に漂着した人々とは明らかに異なる。既に彼らの親類縁者・友人知人たちが日本で生活基盤を築きはじめており、日本の何処で暮らしていても、様々な情報や支援が得られるようになってきた。彼らの居住地は次第に日本各地に拡散しはじめている。しかしそれは、全く無秩序な拡散ではなく、あるベクトルをもちながらゾーンとして広がりはじめた、そういう感じの拡散なのである。



身近なエスニックスポットを訪ねよう

ところで、私たちまち居住研究会の面々は、このところフィールド調査から少し遠ざかっていたのだが、「近頃、我々の知らないところに、思いがけないエスニックスポットが出現しているらしい！」という噂を耳にして、「初心に戻ってフィールドを歩こう」を合い言葉に情報収集を開始した。こうして、今回の特集のトリップがはじまった。詳細なルポは後述するので、ここでは、若干の補足説明をしておく。

第1回目●池袋および中井

1997年10月26日 晴れ

最初のトリップは、都心の池袋と中井（西武新宿線）である。池袋は、東京から埼玉方面へ延びる東武東上線・西武池袋線の始発駅であり、また十条や赤羽を経由して、埼玉からさらに群馬・栃木方面へとつながる沿線の起点ともいえる拠点都市である。東京23区の周縁部から埼玉や千葉方面にかけては、パキスタン・バングラデシュ系の人たちの居住地が広がっている。私たちは、まず池袋の雑居ビルにある彼らの食材店を訪問し、そこで思わぬ大発見をした。何を発見したかはルポを読んでものお楽しみ。しかし、この発見は、後で考えてみると、やはりしかるべき場所にしかるべきモノが出現したという感じで、妙に納得させられるものがあった。

一方、中井がミャンマー人の生活拠点になっているというのは意外に思ったのだが、外国人登録者数（1997年12月末現在）で調べてみると、東京在住のミャンマー人約3,300人（全国では約4,200人）のうち、実に半数以上が、豊島区・新宿区・中野区に集中していた。新宿区の中でも何故中井なのかは謎であるが、少なくともこういう現象が起こり得る素地はあったと言えるだろう。また最近では、大久保や高田馬場にもミャンマー料理店が店出しはじめており、これらの動向から、ミャンマーの人たちの生活行動領域が何となく見えてくる。

第2回目●群馬県伊勢崎市および境町

1998年4月29日 晴れ

第2回目のトリップは、一日がかりのツアーとなった。「東武伊勢崎線イスラム街道」という話を聞いて半信半疑で出発したのだが、低い家並が連なる平坦な

伊勢崎の街で、パキスタンの青年たちに出会うことができた。確かに外国人登録者数でみると、パキスタン人の居住地は、東京から埼玉を経て群馬方面へ延びる傾向にある。聞いてみると3～4年前に来日したという人が多い。現在日本にいる彼らは、1980年代末に来日し、そのまま残っている人たちだと思込んでいたのだが、ビザ免除措置の一時停止が行われた以降も、引き続き来日している人たちがいて、しかも都心から80km以上も離れた地方都市に住んで働きモスクをつくったという事実を知り、この10年間のうちに、彼らの同国人ネットワークが形成されていることをつくづく実感させられた。東武伊勢崎線沿線では、埼玉県春日部市の一ノ割駅に数年前最初のモスクが出来て以来、境町、次いで伊勢崎市にモスクが出現したという。

第3回目●横浜市鶴見区潮田

1998年10月25日 晴れ

第3回目のトリップの目的地は鶴見区潮田である。沖縄をルーツとする日系南米人が多いと聞いて訪問した。南米人は、主に豊田市や浜松市など東海地方の自動車・家電関連の工場労働者として働く人が多く、ほとんどが日系人とその家族である。現在、南米人は外国人登録者数全体の2割を占めており、その数は28万人以上に達している（ちなみにアジア国籍の人は全体の7割）。神奈川県は、愛知県、静岡県に次いで南米人が多い地域で、約24,300人が暮らしている。他県に比べてブラジルやペルー以外に、ボリビアやパラグアイ出身の南米人も多く、鶴見区潮田にも南米各地の日系人が集まっているという特色がある。

今回のトリップを通じて、私たちは、国際化は今や身の回りのごくありふれた出来事になっており、全国津々浦々、国際化しているというのが現実なのであるということを痛感した。内なる国際化の拡がりの中で、私たちまち居住研究会のメンバーは、日常生活の中の国際化を直視し、自分自身の問題として捉え、地域のまちづくりを考えていくことの重要性を再認識させられたのであった。（文責：稲葉佳子）

*本稿および現地ルポにおける在留外国人の数は、外国人登録者数によるものであり、超過滞在者の数は含まれません。また、現地ルポにはモスクの紹介もありますが、宗教施設なので、訪問する際には十分な配慮をお願いいたします。

雑居ビルに隠れた外国

一池袋駅周辺（豊島区）

*訪問時期：1997年10月

中東の都市に行くと、街の真ん中で燦然と輝いているのは、なんといっても尖塔に囲まれたモスクのドームである。モスクは、イスラム教徒の信仰・生活の全ての基礎になっているといっても過言ではないだろう。日本には、イランをはじめとしてイスラム諸国から続々と人々がやってきているが、その割には街にモスクが見あたらない。その答えは、雑居ビルの中にあった。

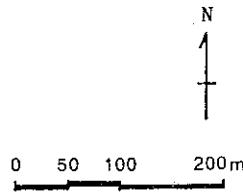
池袋駅西口。駅前広場の一本裏の路地を入ったところに、何の変哲もない雑居ビルがある。この最上階に、モスクがあるのだ。気が付かなければ、そのまま通り過ぎてしまうだろう。ビルの階段を登り詰めたところが、モスクだ。階段の踊り場で靴を脱ぐと、もうそこは礼拝の場である。イスラム教は、建物の外形のいかんはあまり問わないのだ。いまや東京では、こうしたモスクでないようなモスクが主流となってきた。

モスクの階下は、パキスタン料理店になっている。礼拝帰りなのだろうか、大勢の人々が食事している。客の一人は、貿易商らしく、週に一度は来るらしい。さらにその下の階にはパキスタン雑貨店があり、食料品を中心に、雑誌や音楽テープなども取り扱っている。偉大なる歌手、ヌスラット・ファテフ・アリ・カーンの音楽も、聴くことができる。この雑居ビルに来さえすれば、精神的だけでなく、物質的にも満足できるようになっているのである。

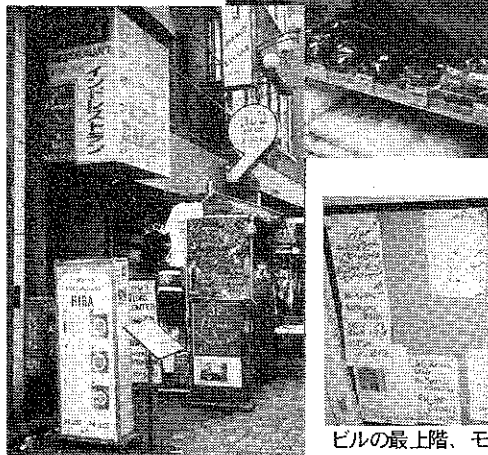
故国への渴望をいやしたいと思っている外国人は、パキスタン人だけではない。だから、池袋駅周辺には、各国から来た人々向けに、各国の雑貨店が勢揃いしている。ほとんどは、雑居ビルの中にひっそり店を構えているから、口コミなどで知った馴染み客ばかりのようだ。中国系、東南アジア系、韓国系、中東系など、全部回れば世界中の日常食品があらかた入手できちゃう。

駅から徒歩10分圏でも、ネパール料理店が営業している池袋。この街で暮らすと、毎日が世界旅行になるかも知れない。（文責：笠原秀樹）

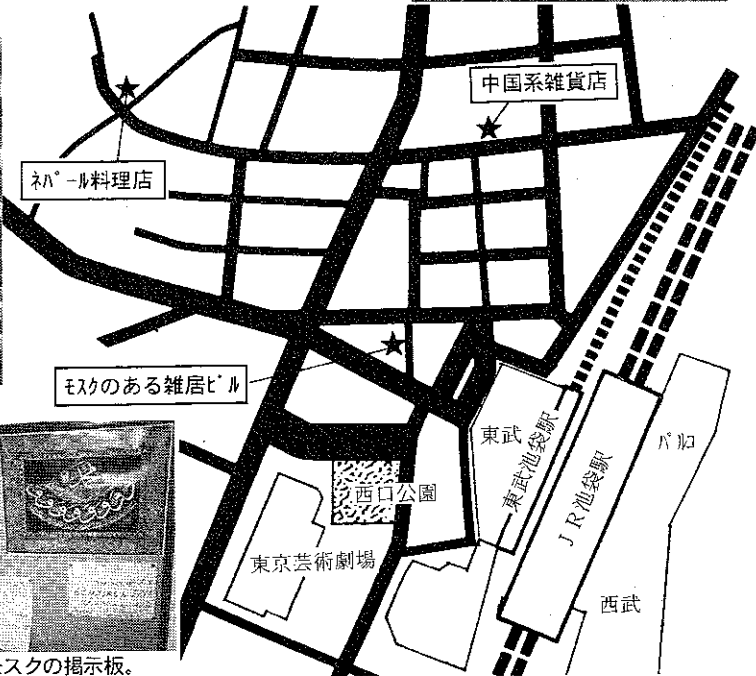
ビルの4Fにある中国系雑貨店。アジア諸国の食材等を販売している。



1つの雑居ビルに、インド（パキスタン）料理店、食材・雑貨店、モスクが入る。



ビルの最上階、モスクの掲示板。



第二の故郷

一西武新宿線中井駅界隈（新宿区）

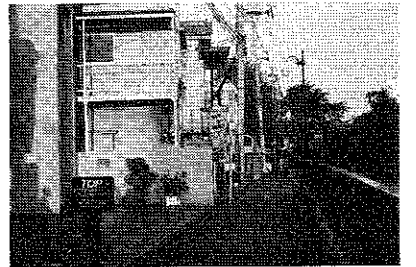
*訪問時期：1997年10月

西武新宿線で高田馬場から2つめに、中井という駅がある。この駅の北口の山手側は、戦前の良好な住宅開発で有名な目白文化村に近接する静かな住宅街である。一方、南口の低地側には妙正寺川が流れ、周囲は至って庶民的な住宅街である。東京に長く住んでも、来たことがない人が多いであろうこの街は、しかし、在日ミャンマー人の中では絶大な人気を誇る。

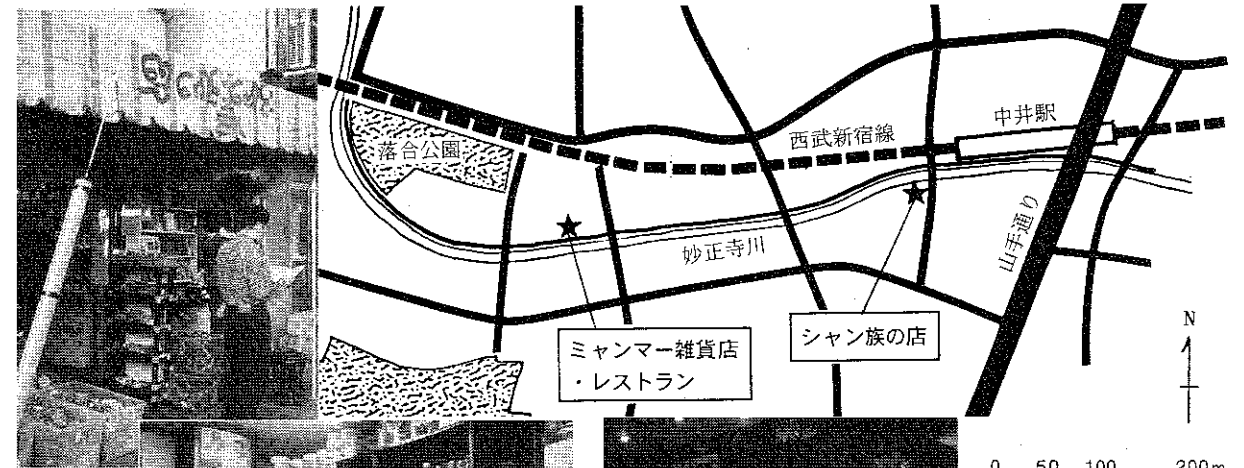
神田川をしばらく遡っていくと、川沿いのプロムナードに面してミャンマー雑貨店が見えてくる。雑貨店は、ミャンマーの食料品や雑貨がおいとあり、ミャンマー人でにぎわっている。しかも隣にはミャンマー料理店「トップ」があり、雑貨店での買い物帰りの人たちがたくさん来ている。ミャンマー料理は、香辛料が利いていてとてもおいしいし、しかも安い。食事の在日ミャンマー人の話題は、現ミャンマー政府の政策に対する不満になりがちのようだ。

店は、西武沿線一帯から広域的にミャンマー人客を集めている。中井は、いわば東京のリトルヤンゴンとでもいうことができるだろう。もっとも最近では、郊外にも同業態の店が立地し始めたため、遠方の客はそちらに移りつつあるようだが。

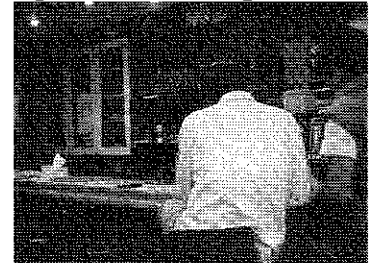
ミャンマーは、民族構成が複雑なことで知られているが、タイ国境周辺の少数民族であるシャン族は独立を目指して反政府闘争を行っている。トルコ・イラク国境のクルド人と同じように、両国のシャン族を統合して一大国家を樹立しようというわけである。面白いことに、ミャンマー料理店のすぐ近く、道路一本裏に入ったところに、シャン族料理店「VENUS」がある。ここは、シャン族の人たちのたまり場で、日本語のメニューはない。いまでは日本で静かに暮らしているかつての独立運動の闘士も、ここにやってくる。老闘士から故国へのやるせない想いを聞くと、この世の不条理を思う。（文責：笠原秀樹）



妙正寺川沿いにミャンマー料理店、食材店、雑貨店が3軒ほど並んでいる。



ミャンマー食材店。



ミャンマー料理店。日曜日の昼下がり、三々五々集まってきたミャンマーの人々。

アッラーのもとに結ばれるムスリムたち

—伊勢崎市・境町

* 訪問時期：1998年4月

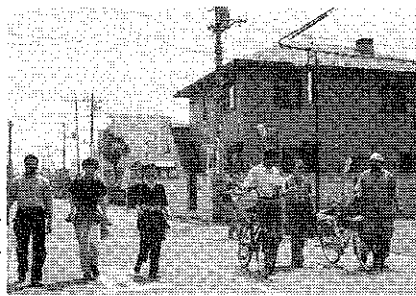
◆伊勢崎周辺のモスクを訪ねる

群馬県の伊勢崎市にムスリム（イスラーム信奉者）たちがモスク（礼拝所）を自分たちの力でつくり、信仰をよりどころとしながら生活を送っているような。信仰のためとはいえ、今まであまり縁のなかった日本の社会に、自力で礼拝所をつくるのはスゴイ。

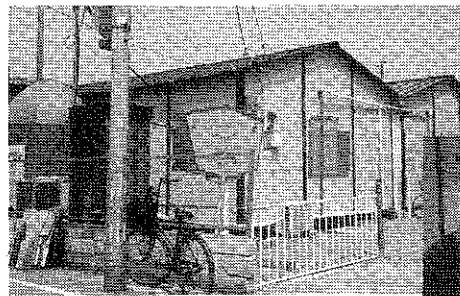
なにはともあれ実態観察、というのが、まち居住研の行動パターンである。初夏めく日の早朝、有志数名が乗った東武伊勢崎線電車は関東平野をひた走り、埼玉県との県境を流れる利根川を越えて群馬県に入る。

東京から約2時間、やはり遠い。終点、伊勢崎に降りたら、ともかくモスクをめざす。その見当へ歩いていくと、向こうから自転車を引いてくるそれらしき男性3人に会った。声をかけると、3人ともUターンして、わたしたちをモスクへ案内してくれた。

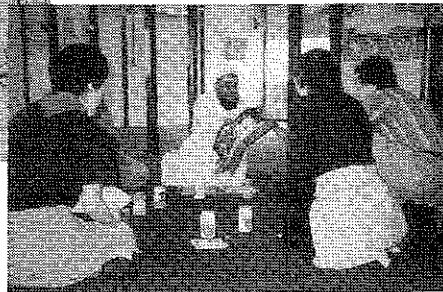
モスクの名はジャミア・モハマディア礼拝所。駐車場跡に建てられたプレハブ造りだが、ちゃんとドームもつくってある。礼拝室に請じ入れられると、イマームと呼ばれる説教師が現われ、わたしたちの質問に快く答えてくれた。



いざ、モスクへ。パキスタン人のムスリムたちに案内されて。



ジャミア・モスク・モハマディア。本来は屋根の上に建てられるドームが作り付けにしてある。



礼拝室でイマーム（中央）を囲んで。缶ジュースがふるまわれた。

このモスクは3年半前に東京および近県に住む信徒たちによって建てられた。師はバングラデシュからやってきた。同席者は先ほどの案内者3人で、みなパキスタン人、30代前の働き盛りである。組立・溶接・プレスなどの工場で8時間労働し、会社が保証人になってくれて3人で2DKに住んでいる。

礼拝室でのヒアリングが終わると、同じ敷地に建つイマームが起居するプレハブ「スーパーハウス」に案内された。2坪ほどの室内で、かしこまって師のお説教をひとしきり聞くことになったのは礼儀にもかなうことだった。

「神さまは、どこにいますか？」

「あの、あちこちに……」

「なに？ もそっと前、もそっと前へ。神は、アッラーお一人です。はい、みんなで、唱えましょう。

ラー イラーハ イッラッ=ラーフ、

ムハンマドゥン ラスールッ=ラーフ

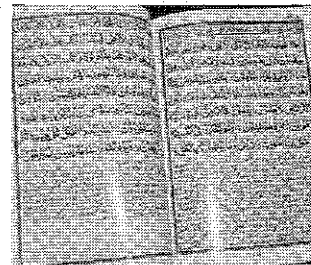
（アッラーの他に崇拜する神はなく

ムハンマド=マホメットはアッラーの使者である）

はい、もっと大きな声で！」

とうとうイスラームの最も基本的な教え「カリマ・タイバ」を、訪問者一同、大声で3度斉唱することになった。

お説教が済むと、昼時なので、みなで食事をという師の申し出である。どうも、招待するつもりらしい。わたしたちは、もはや時の流れに身を任せ、ムスリムたちとともにイマームの後につき従った。食事の席にもう一人のパキスタン・ムスリム、ムハンマド・ハーンさんが一行に加わったが、彼は食事の済んだわたしたちにさらにシークカバブーをご馳走してくれたのだった。新伊勢崎のこのインド料理店でたっぷり時間をか



聖クルアーン（コーラン）。アッラーの啓示が記された聖典。イスラームの教えと戒律の基本。

けてから、さて店を出たときは、もう日もだいぶ傾いていた。

食事代は当方が支払うことでどうにかケリをつけたが、その足でハラール・フード店（イスラーム式食材店）に立ち寄って、またもお土産を持たされた。客人をとことんもてなすのが、ムスリムの信仰生活上の慣習らしい。境町にある、もう一つのモスクを訪ねると、はじめから参加していた無口な好人物のアブドゥール・アリさんが案内するという。

そのダルサラーム礼拝所は、もとパチンコ店だったが4年前にムスリムたちが購入、モスクに改装したものだ。1階が礼拝室、2階が休息所。7～8人のバングラデシュ・ムスリムたちが応じてくれたが、ジャミア・モハマディア礼拝所の人たちよりはやや打ち解けず、写真撮影も許してもらえなかった。国の違いか、もしかしたら、不浄な女性が3人も訪れたからかもしれない。（モスクには原則として女性は入れない。）

二つのモスクを訪ね終わり、境町駅近くのインド人が経営するハラール・フード店に立ち寄ってから、わたしたちは東京へ帰る電車に乗りこんだ。日はすでに落ち電灯の灯りははじめた駅の改札口のところで、最後までつき合ってくれた人懐こいアリさんが、はにかみがちに手を振ってくれていた。

◆多様な国籍の外国人労働者が集まる伊勢崎市

伊勢崎市は、かつては伊勢崎銘仙などを産した有名な絹織物の産地だった。現在は、家電メーカーや、中小の組立工場などが集中する都市に変貌している。

この都市に、約10年ほど前から、あらゆる国籍をもつ外国人労働者が働き手として流入してきた。その数5,748人。伊勢崎市の総人口125,656人の約5%にあたる。国籍はブラジル（2,459）、ペルー（1,447）、ベトナム（420）、フィリッピン（349）、中国（171）、韓国・朝鮮（163）、パキスタン（122）、その他じつに49カ国にわたる。そのうちイスラームを信奉する国はアフガニスタン、バングラデシュ、インドネシア、イラン、パキスタン、トルコなどで、外国人登録者総数の約7%（410）になる（1998年12月末現在）。

異国にあって心の支えとなるのは、同じ信仰のもとに集うことであろう。その点、信仰の規範と生活の規範を等しくし、聖地メッカを中心に上下の関係なく祈りの場をもつことが許されているイスラームは横のつながりが強い。現在、神戸、東京、埼玉、長野、沼津などにさまざまな形態のモスクが設立されているが、日本社会の国際化がすすめば、これからさらに多様

に出現する可能性は高い。（文責：太田多圭子）

新伊勢崎駅近くのハラール・フード店。イスラーム社会の日常生活に必要なものが、すべてそろっている。

ダルサラーム・モスク（境町）本物のミナレット（尖塔）の代わりに大きな絵が掲げられている。

ハラール・フード店
元パキスタン食材店だったので、入口の看板にはパキスタン国旗が残る。中はハラール・フード。

ハラール・フード店（肉屋）
冷凍庫には巨大な肉がぶら下がる。関東一円に卸しているとのこと。

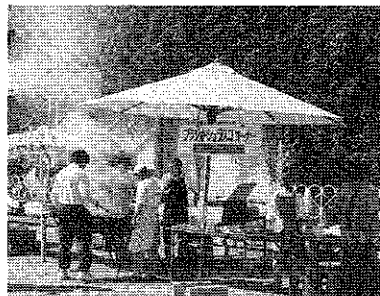
モスク
ダルサラーム礼拝所

沖縄にルーツを持つ日系南米人コミュニティ —横浜市鶴見区

*訪問時期：1998年10月

◆鶴見小で開かれた「外国人児童生徒保護者交流会」

初秋を思わせる穏やかな10月下旬の日曜日、横浜市立鶴見小学校で「外国人児童生徒保護者交流会」が開催された。交流会は鶴見区国際交流事業推進委員会の主催、外国人児童生徒保護者交流会（IAPE）の共催で、1993年に始まりすでに6回目を数える。11時開始からやや遅れて私たちが到着した時には、小学校のグラウンドには、ブラジル料理・シュラスコを焼くおいしそうな香りが漂っていた。中学生たちが担当する受付を済ませて、体育館へ。会場では、すでにスペイン語の歌や踊りが賑やかに行われ、南米の華やかな民族衣装を着てそれぞれの出番を待つ子どもたち、ビデオやカメラを構える保護者たちの熱気があふれていた。周囲の壁には南米各国の衣装や風景写真、小物などが飾られ、日本語、スペイン語、ポルトガル語で解説されている。お母さんたちの手作りお菓子の販売コーナーも。これだけの準備は大変だったろうなあ！と感心しつつ、ペルーのおやつを食べてみる。一見ぜんざいのようなのだが甘さを抑え、くだもの味がさわやかに口の中に広がった。



鶴見小の校庭では、交流会の昼食準備。厚切り肉を豪快に焼いたシュラスコをパンに挟んでサンドイッチのできあがり！



交流会会場となった体育館には南米各国の小物や名産品、衣装、風景写真などが飾られ、雰囲気盛り上げる。

横浜市鶴見区は京浜工業地帯の一角として発展し、戦時には工場労働者として沖縄系住民の集住や朝鮮人の強制連行なども行われ、沖縄出身の人々や韓国・朝鮮籍を持つ人々が今も多く住み続けている。そこへ90年の入管法改正を境として、沖縄出身者ネットワークを頼って沖縄にルーツを持つ日系南米人がどっと流入した。ブラジル人を例に鶴見区の外国人登録者数を見ると、88年には36人であったが90年には596人、92年には1475人とこの時期激増し、97年現在は1453人となっている（各年12月末現在）。交流会は、家族で来日した日系人の子どもの孤立や教育問題をきっかけとして、外国籍児童・保護者と学校の先生、地域ボランティアが交流を持とうと始まったという。IAPEでは、子どもたちが元気を取り戻し、母語学習に励めるよう、94年6月からポルトガル語・スペイン語講座も開設し、他にも子どもたちがルーツを探る沖縄への旅などを開催しているそうだ（*1）。

この日の交流会のプログラムはペルーの踊り、沖縄の三線、ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン…と続き、午後には保護者ネットワークづくりや子どもたちの母語別対抗ミニサッカーも予定されていたが、潮田町の見学を控えていた私たちは、IAPEのスペイン語・ポルトガル語教室の先生たちの紹介が終わったところで、体育館を後にした。



交流会では、元気いっぱいの子供たちによるスペイン語・ポルトガル語の歌や踊りが繰り広げられた。

◆潮田町のラテンアメリカ食材店・レストラン

鶴見川にかかる潮鶴橋を渡り、南米の人たちのレストランや食材店があるという潮田町へ。（財）神奈川県国際交流協会の富本潤子さんから事前に送っていただいた地図を頼りに、商店街へ入っていった。

まず驚かされたのが、商店街そのものだ。一本の通りが続く“商店街”を想像していたが、さにあらず。碁盤の目状の通りの縦方向にも横方向にも商店が連なり、まるでまち全体が商店街と思えるほど大らかな広がりを持っている。そして、その広がりの中に、ブラジル料理の店、南米沖縄料理の店、ポリビア料理の店、ブラジル食材店などが、ぽつぽつと点在しているのだ。商店街の中にあるもんじゃ焼きさん、うどん屋さんといった自然な感じで南米のお店に出会う。事前情報がなければ、2・3箇所行き当たるのがせいぜいだろう。ポリビア料理の店に入り、チーズや挽き肉を挟んだ揚げパン・エンパナーヂャやキャッサバのフライを試してみる。店内にはスペイン語の新聞「インターナショナル・プレス」や雑誌も置かれ、情報交換の場にもなっている。

この町では、沖縄と南米の融合が特に目を引く。仲通りにある「沖鶴会館」は、鶴見沖縄県人会や旅行社、沖縄食材店、沖縄そばの店などが入る建物だ。ここは、沖縄や、戦前のハワイ・南洋諸島への移民たちが、戦後の引き揚げ後に土地を買って建物を建てて身を寄せる場所を確保したことに始まるそうだが、沖縄出身の日系人たちのコミュニティ結節点にもなっているという（*2）。食材店を覗いてみると、沖縄の黒砂糖や麺類に混じってブラジルやペルーのスパイス・お菓子も並ぶ。商店街から少し奥まったところにある“沖縄南米料理店”は、沖縄出身で南米を移り住み鶴見にやってきた方が始めたそうで、メニューには沖縄そばとPASTELが仲良く並んでいる。私たちは、ふだんは滅多に出会わない取り合わせの食事を堪能した。交流会を見学し、まちを歩いてみて、鶴見区あるいは潮田町に、外国人居住者を受け入れる地域の包容力のようなものを感じた。それは、工場労働者としてさまざまな人々を受け入れてきた、まちの歴史の積み重ねが育んだ地域性なのかもしれない。

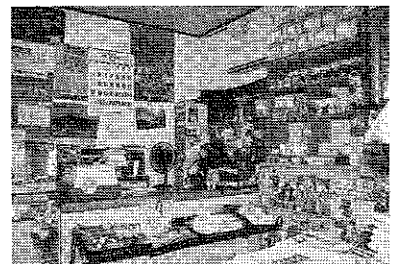
（文責：塩路安紀子）

参考文献

- *1「多文化共生をめざす地域づくり」沼尾実編、明石書店
- *2「エスニシティと都市」広田康生著、有信堂



横浜市国際学生会館（潮田交流プラザ）
IAPEのポルトガル語・ポルトガル語教室開催場所。サバチムや日本語ボランティアグループ等も活動。



ブラジル雑誌や食材の並ぶ店。航空券も扱っている。



沖鶴会館の1階には沖縄の食材店、沖縄そばの店、旅行代理店等がある。食材店には南米の食材も置いてある。

- ①TUCANO（ブラジル・ペルーの食材等）
- ②ALVORADA（ブラジル食材・ビデオ等）
- ③ぶーがる（総菜店。IAPEの代表を務める玉城洋子さんの店）
- ④AMIGO（沖縄・南米料理）
- ⑤沖鶴会館（鶴見沖縄県人会、旅行社、沖縄食材店等。食材店では南米の食材も扱う）
- ⑥LOJINHA YURI（ブラジル食品・航空券等）
- ⑦ANDES（ポリビア料理）
- ⑧もろみや（沖縄・南米料理）
- ⑨MAR AZUL（ブラジル・南米料理。ポルトガル語のカラオケあり）
- ⑩小さな森（喫茶店。お菓子のアルファフォレスが人気）



「まち居住研究会」から読者の皆さんへ

私たちは、これまでの研究成果を
地域に還元していきたいと思ひます。



写真は『住宅時事往来』7～12号を担当したメンバーです。
左から稲葉佳子・太田多圭子、右は塩路安紀子、左下は小菅寿美子、右下は笠原秀樹です。

***外国人の住宅問題からコミュニティ問題へ**

まち居住研究会が『住宅時事往来』第1号を発行したのは1992年6月でした。第1号～第6号までは、1980年代後半から急増したニューカマーズ外国人について、欧米人・中国人・アジア系労働者・日系人という特徴的なカテゴリー別に、彼らの抱える住宅問題と彼らを受け入れた地域の実状を報告しました。

しばらく休刊した後、再び1995年から第7号を発行しはじめました。ちょうどこの頃から、バブル経済が崩壊したにもかかわらず、外国人の数に減少の兆しは見られず、彼らの定住化が現実問題となってきました。再刊に当たり私たち自身の視点も、住宅問題から居住問題やコミュニティ問題へと移っていきました。第7号では定住歴の長いインドシナ難民や中国帰国者等の問題取材し、その後は欧州の事例報告も含めて多様なテーマを取り上げてきたのですが、1997年頃から、自治体の国際化シンポジウム等で「まち居住研究会」も外国人の居住問題で参加を求められることが多くなり、日本がいよいよ地域社会の国際化に向けて対応を迫られる時代に入ってきたことがわかりました。

***研究だけでなく地域の人と一緒に考える活動を**

「まち居住研究会」として研究活動を続けてきた私たち自身も、今、転機を迎えようとしています。これまで長年にわたり外国人居住に関わる調査研究を続けてきましたが、今後は調査研究し報告するだけでなく、これまでに私たちが知り得た情報や研究成果を地域の人たちに還元していきたいと考えるようになりました。実は私たちは、昨年から1年間をかけてそのための助走を始めました。

具体的には(財)ハウジングアンドコミュニティ財団の1998年度市民活動助成を受け、新宿区大久保地域をフィールドに、地元の日本人住民(マンション管理組合役員など)や不動産業関係者、外国人、市民活動グループの人たちと共に、分譲マンションをモデルケ

ースとして、日本人と外国人が共に暮らしていくための「国際化に向けた共住のためのルール・システムづくり」を考える勉強会をたちあげ活動を始めています。今後しばらくの間は、大久保を活動拠点としながら多文化共生型のまちづくりを目指して、少しずつ地域の中でのネットワークを形成していきたいと思っています。また大久保から全国の外国人居住に関わる地域に向けて発信していければと考えています。

***『住宅時事往来』にご支援ありがとうございました**

大久保での勉強会で見てきたことは、居住に関する問題は、外国人の問題というよりは、むしろ外国人・日本人の別なく考えねばならない問題であるということです。また、国際化に向けて改善すべき日本の制度やしくみがあるのはもちろんですが、住まい方に関する問題は、各国固有の文化や伝統・生活様式の中から生まれてきたものであり、相互理解を深めていくなかで議論していくことこそ大切だということもわかってきました。この大久保での活動状況は、新たにニューズレター形式でお伝えしていく予定です。皆さま方からのご意見も掲載し、双方向コミュニケーション型のニューズレターにしていきたいと考えています。

つきましては、「まち居住研究会」が新たな展開に向けて活動しはじめたのを契機に、長年にわたりご愛読いただいた『住宅時事往来』は、第12号をもって終了することになりました。

これまで『住宅時事往来』を支援していただいた皆さま方には、心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。『住宅時事往来』は終了しますが、「まち居住研究会」は今後も活動を続けていきますので、これまでと変わらぬ叱咤激励のほど、何卒よろしくお願ひ申しあげます。それでは、新たに発行するニューズレターで、またお会いしましょう。(まち居住研究会一同)



編集・発行：まち居住研究会(ジオ・プランニング内) tel. 03-3238-0574 頒価300円、無断転載を禁ず

*『住宅時事往来』は、学芸出版社のホームページでも見られます。http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/